

第 8 回教育哲学会奨励賞 選考結果および授賞理由

選考結果

第 8 回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第 122 号、123 号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、吉野教会員の「19 世紀初頭のフランスにおける教育・科学・統治 — マルク=アントワーン・ジュリアンの教育思想を中心として —」（『教育哲学研究』第 123 号所収）を選定した。

授賞理由

吉野論文は、大革命期から 19 世紀前半にかけて活躍したフランスの著述家マルク=アントワーン・ジュリアンの教育思想を、当時の知的文脈のなかに位置づけ、その特徴を明らかにすることを目的としている。ジュリアンは「比較教育学の祖」として知られているが、その教育思想自体はこれまでほとんど注目されてこなかった。吉野論文では、まず当時のフランスで大きな思想的影響力をもった「イデオログ」たちの人間科学理解が検討される。それによれば、彼らは人間科学の目的のひとつを国家の統治の合理化に置き、彼らの影響下にあった初等教育協会は、統治の合理化という課題を、教育の科学化を通して実現しようとしたのであった。そして、協会の主要メンバーであったジュリアンの「教育科学」（比較教育学を含む）もまた、協会の政治的傾向を継承していたことが指摘される。

続いて、ジュリアンの教育思想の特徴の解明が試みられる。ジュリアンの「教育科学」では、教育目的として人間の幸福が掲げられるが、その内容に関わる理論的、思想的探究よりも、幸福の実現に結びつくと考えられた自己管理の技法の解明に重点が置かれていた。また、彼の教育思想の中心に位置づく時間管理術は、一見すると教育領域とは異質な行政・軍事・商業領域における統治の技法を、教育の方法へと変換したものであった。これらの検討を踏まえて、吉野論文は、ジュリアンの「教育科学」は教育と統治を技術論的な知の水準において統一するものであった、と結論づける。

吉野論文における論証が、統治技術と教育との結びつきというフーコー的な構図を超え出ているのか否かについては、たしかに議論の余地がある。けれども、禁欲的で手堅い読解を通して、統治のための知としての教育科学が立ち上がる時空間を問い直すその手法には、単なる歴史研究にとどまらない教育哲学的、思想史的な意義が認められる。教育と科学と政治が緊密に絡み合う様子を思想的、時代的背景のもとで描いた本論文は、理論と実践との関わりを考える上でも、今後多くの研究にとって示唆に富むものである。

以上から、理事会では吉野教会員の論文「19 世紀初頭のフランスにおける教育・科学・統治 — マルク=アントワーン・ジュリアンの教育思想を中心として —」を第 8 回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。